画家　村中秀夫氏(愛知県豊田市)奉納

産土

彦島八幡宮社報
第 56 号

「感謝、謙虚、工夫、希望(四K)
～敬神生活を心掛けましょう～」

宮司　柴田　宜夫

平成三十一年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。

いよいよ今年の五月、天皇陛下が御位をお譲りになり、新しい二百四十八番目の元号を、新しい天皇陛下の「改元の詔（みことのり）」を承（うけたまわ）り、新しい時代の幕明けを迎えようとしています。しかしながら、様々な困難を克服しなければならない、「課題克服先進国」なのが、今の日本の危機的状況下でもあります。

民俗学者の柳田國男（やなぎだ　くにお）さんは、「敬神（けいしん）は日本人の道徳」だと仰（おっしゃ）いました。「天然の無常」である大自然のなせる災害に、我々は無力でありますから、今ある命に感謝をし、お陰様でという謙虚な気持ちを忘れない、まさに、「朝に祈り、夕べに感謝」という敬神という日本人の道徳です。さらに、私たちは生きるために必死に毎日を過ごし、様々な困難を乗り越えなくてはなりませんが、そのためには、やはり、知恵をだしあう、創意工夫が必要です。そして、「人事を尽くして天命を待つ」ではありませんが、「神様がお守りくださり、きっとよくなる」という希望という「神信心」を持ち続け、その希望を共有する仲間とのつながりを深めてゆく、その生活こそ、「敬神生活」で、「課題克服」の心掛け、手立ての一つになるのではないでしょうか。デジタル放送では、四K放送も始まりましたが、「感謝、謙虚、工夫、希望」という四Kの敬神生活を心掛けましょう。

幸多かりし日々でありますように。

八幡宮からのお知らせ

どんど焼き＝一月十四日(月)執行【午前十一時頃 忌火火入式】

※荒天の場合は一月二十日(日)に順延します。

正月飾りは、みかん・橙(だいだい)を外してご持参下さい。

執行後は来年まで受付致しませんので、予めご了承下さい。

㊟鏡餅・ビニール袋・結納品・人形・仏具・民芸品等は一切お断り致します。

彦島全島の総氏神

彦島八幡宮の由緒

◇略記

当宮は平治元年（一一五九）十月十五日、本当開拓の主祖・河野道次（こうのみちつぐ）自ら祭主となり宇佐神宮より御祭神を勧請、祭祀なされました。御祭神は應神天皇　相殿に仲哀天皇　神功皇后　仁徳天皇をお祀りしております。一名灘八幡と言っただけに宮の沖合を通過する船は必ず「半帆」の札をとったと云われる事から造船、漁業関係者の崇敬が厚く、又、安産の神として別名「子安八幡」と崇められて併せて武神、文化神、生産神として御霊験あらたかな神様であります。尚、秋の例大祭「十月二十一日に近い土・日曜日」には八百五十九年伝来の無形民俗文化財「サイ上リ神事（さいあがりしんじ）」があり由緒の深さを示しております。

◇彦島十二苗祖（びょうそ）

当宮創祀者である河野通次は保元元年（一一五六）保元の乱（後白河天皇と崇徳上皇間の皇位継承問題と、藤原忠通と藤原頼長間の摂関家の内紛によって源氏と平氏を巻き込んだ権力争い）に敗れた後、園田一覚、二見右京、小川甚六、片山藤蔵、柴崎甚平を率いて彦島の地に敗走し、その二十有余年後には、植田治郎、岡野将監、百合野民部、和田義信、登根金吾、富田刑部が来島して総勢十二名の将を中心に一族郎党が農耕漁釣に精を出し彦島を開拓しました。以来「彦島十二苗祖」と称えられています。

今日も末裔の方々が、「サイ上り神事」をはじめとする伝統神事を継承されています。

◇光格殿と彦島八幡宮の発祥

保元二年（一一五七）十月のある日いつもの如く沖に出て漁をしていますと一天俄にかき曇り未甲の方角の海上に紫雲たなびき海中より日月の如く光輝く物があるのを見て、通次等は不思議な思いで網を打って引き揚げるとそれは一台の明鏡でありました。しかも鏡の裏には八幡尊像が刻まれていたのです。通次等は大いに喜び、之は我ら一族の護り本尊であると、海辺の一小島（舞子島）の榊に一旦鏡を移し、その後祠を造営して鏡を納め光格殿と命名しました。これが当八幡宮の発祥であります。

又舊記に海底より光り輝く物があり河野一族等鉾にて之を突きし八幡尊像の左眼がささりて賜りたりと云々という口伝も残っております。

※戦前の彦島の地図

八幡さんの思い出写真

（昭和30年代初頭の例祭の様子）

彦島八幡宮　検索

宮司プレス総集編

※128号～136号（要点抜粋）を総集編としてお届けします。
全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第一二八号（平成二十九年十二月十四日）

さて、今上陛下は、再来年四月三十日に御位をお譲りになる、御譲位をされまして、実に光格天皇以来、二百年ぶりに御譲位の儀礼が行われることとなりました。それにともない、改元が行われます。今の元号である「平成」、「書経」の一節「地平天成」から引いた二文字も候補の一つだったそうです。元号は、天皇陛下と時間を共有している時間座標軸なのです。平成に残された時間は、一年と五ヶ月余り、大切に過ごしたいものです。

四百年の長い将棋界の歴史のなかで、史上初めて「永世七冠」の称号を獲得された羽生棋聖は、「十年とか二十年、三十年を同じ姿勢で、同じ情熱を傾けられることが才能」と仰っています。私共は、羽生棋聖の仰る「才能」、日本人の「才能」を見失ってはならないと思います。かつては、「お天道さまがみている」として、人知の及ばない神聖な存在に対する畏敬の念、恐れと敬いのミックスした心が、存在しました。明治時代の神道家である本田親徳は、

「音に聞き　眼に見える物等（ものら）
悉（ことごと）に　に　産土神の神身にこそあれ」

という和歌を詠まれています。音に聞き、眼に見えるものすべて、当たり前のことにも神様の姿、神様のなせる業と、心から感謝して感動する、その心がけを忘れない、日本人の「才能」ではないでしょうか。残り少ない平成の時代、次の元号の時代が、輝かしい未来であるためにも、大切に守り伝えていきたいものです。　ご自愛をお祈り申し上げます。

第一二九号（平成二十九年十二月三十一日）

来年、平成三十年の干支は、「戊戌」で、いぬ年です。戊は、陽の土を表し、山や丘の土です。また、もともと茂（ぼう、茂るの意味）をその語源としています。草木が十分に繁茂して盛大となった状態を表しています。つまり、植物の成長が絶頂期にある状態です。一方の十二支にも前述の五つの陰陽が割り当てられおり戌も陽の土を示します。戌は、滅（めつ、ほろぶ、切るという意味）で、草木の枯死する有様です。陽の土でありながら、こちらは、草木が枯れる状態となるわけです。戊戌は、相反する、反目し合う干支の組み合わせです。同じ陽の土で重なっている状態は、五行思想で比和（ひわ）と呼びます。同じ気が重なることで、その気はより強くなります。したがって、良いものはより良くなる一方、悪いものはさらに悪くなることも考えられます。一年をとおして何事も、慎み深い生活を心掛けることが大切です。

来年の干支は、動物では、犬が当てられています。ことわざに、「犬も歩けば棒に当たる」とあります。何もせずにじっとしているよりも、何でもいいからやってみれば、思わぬ幸運にめぐりあうかもしれないという意味です。困った時や不安な時にも、きっと必ず、光をみいだすことができるんだという希望を持ち続け、犬のことわざにあやかり、幸運へと導かれたいものです。

第一三〇号（平成三十年一月十一日）

毎年、その年の干支にちなんだ書初めをしています。平成二十六年の午年から今年で五年目です。「戊」を使った熟語、かなり苦慮しましたが、「戊」に一つ加えた、「成」を使った熟語に落ち着きました。

「天成（てんせい）」と「直誠（ちょくせい）」と浄書しました。「直誠」は、私の造語（ぞうご）ですが、まさに、「未熟さゆえのひたむきさ」こそ、真心であり、「初心忘るべからず」に通じる真心、「直誠」であります。

「天成」。辞書をくりますと、「人の手をくわえない自然そのもの、もってうまれたもの、天性と同じ意味」とあります。私どもの身体は、船に魂が乗っかっているようなものだそうです。魂は、心の働きをつかさどるものだそうですから、心身共に健康でなければならないわけです。自分の持てる才能や特性を信じて、心身共に健康で、謙虚に慎み深い生活を心掛けることが大切です。夏目漱石は晩年に、「則天去私」という言葉を残されました。大自然に身を委ね、私利私欲をかなぐり捨てて生きてゆく、まさに、「天成」ではないかと思い浄書しました。

「二十五年周期説」、次の周期は、西暦二千二十年東京オリンピック開催の年が起点となるそうです。今が、「衰退と不安」の時の踏ん張りどころです。勇気を振り絞り、一歩でも二歩でも踏み出せば、この「戊戌」の干支の字は、「成成」となるのであります。大願成就となるのです。「直誠」のひたむきな真心を忘れず、「天成」の慎み深い生活で、日々の営みが笑み栄えますことを心からお祈り申し上げます。

●第三十一号（平成三十年一月六日）

日本には、「パクス　ヤポニカ」、ラテン語で「穏やかな平定された日本」という意味ですが、有史以来そのような時代が二回あったといわれています。それは、平安時代から保元の乱までの三百五十年間と江戸時代の二百五十年間だといわれています。その二回目の「パクス　ヤポニカ」より新たな時代の幕明けをしたのが、明治維新であります。日本は、これまで五回、奇跡を起したといわれています。一回目が元寇、そして二回目が明治維新です。三回目の奇跡が日清戦争に勝利したことです。そして四回目の奇跡が、日露戦争の勝利です。さらには、大東亜の戦争に敗北、壊され失われた建物や鉄道といったインフラの復興、「キャッチ　アップ」を成し遂げたのが戦後の復興、五回目の奇跡を起したのです。平成を迎え、まさに、坂の上の雲に至りました。ところが、経済はバブル到達とともに、崩壊、失われた二十年、下り坂となったのです。これから、六回目の奇跡を起さなければなりませんが、その道のりは、険しくも辛いものだと思います。六回目の奇跡は、「さわやかな風を受けて高原をゆっくりと歩く」、優位性を保ちながら歩んでゆく、「成熟戦略」ではないかと思います。明治時代にうちたてられた「伝承」と「伝統」の見事なバランス、その「精神、こころ」を取り戻す、日本人の心の「キャッチ　アップ」に、奇跡を起す原動力が秘められているような気がしてなりません。今上陛下と共有できる時間を大切にしながら、御在位三十年を奉祝し、来る十一日の紀元二千六百七十八年の記念の日を迎えたいと思います。

●第三十二号（平成三十年三月二十一日）

みなさん、「風花（かざはな）」という言葉をご存知ですか。晴天にちらつく雪、風上の降雪地から風に送られてまばらに飛来する雪のことです。初冬の風が立って、ちらちらと降る雪や雨のことでもあります。それは、紛れも無い純白で、何にも染まらない純粋な美しさを保ちながら、ちらちらと飛来するのです。しかし、その純白で無垢な雪も、地に積もれば、泥にまみれたりしながら、本来の純白さを失ってしまいます。人も同じなのでありまして、神様からたまわった美しい身体と心が、世の中の不浄なるものに触れて、本来のものを損なってしまうのです。人は、皆、未熟者、未熟者とわかっているから、懸命に努めようと励む姿こそが、「風花」であり、「本性を失わない生き方」、まさに、清々しい生き方なのではないでしょうか。

私は、「三（さん）そう」、三つの「そう」をとても大事にしています。一つめは「服装」、決められた装束、不敬にならない身だしなみ、清潔な装束で御奉仕をすることです。二つめが、「人相」です。これは、もってうまれた顔のことではなくて、明るい笑顔のことです。「神喜人喜地喜（じんきじんきちき）」が、「人相」なのです。そして、一番大事なのが、三つめの「情操」、心です。心の乱れは、そのまま、服装や人相にも影響を及ぼしてしまいます。「風花」の心を忘れないようにしなければなりません。

「三そう」の心がけを忘れずに、「風花」のような清々しい生き方で、「神喜人喜地喜」の運命共同体としての地域社会が構築されますように。

●第三十三号（平成三十年四月二十一日）

米国のシンクタンクであるユーラシアグループの代表である、イアンブレーマ氏は、「今、世界は、『Gゼロ』、指導者が不在で、この十年は秩序の見えない混沌（こんとん）の時代が続く」と警鐘を鳴らしておられます。まさに、厳しい逆境の国際社会の一員として、「冬来たりなば」冬に立たされていますが、辛抱して耐え抜けば、やがて、散った桜も再び盛りと咲く、「春遠からじ」、幸福が訪れるという、希望を持ちたいものです。「堪忍は無事長久の基」ですので、辛く苦しいことも耐え忍びつつ、理想に向かって進みたいものです。ナポレオン治世時代の「ああ無情」の作者である、ビクトルユーゴは、「未来は弱き者には不可能、臆病者には未知、そして、思慮深く勇敢な者には理想という名を持つ」と述べられています。未来を理想という名にするためにも、日々を積極果敢に前向きに過ごしたいものです。

徒然草第九十三段にも「されば、人、死を憎まば　生を愛すべし。存命の喜び日々に楽しまざらんや」と記されています。自分が生きて、今存在しているという、これに勝る喜びがあるでしょうか、死を憎むのなら、その喜びを日々確認し、今ある命を楽しむべきだと、生きている今のありがたさを自覚しなさいと、優しく諭されているのです。今ある命に感謝を捧げる、これこそが、神社神道の真髄なのです。

私共をとりまく環境も厳しいものがありますが、前述のとおり、「堪忍は無事長久の基」、「存命の喜び日々に楽しまざらんや」で、これからの未来が輝かしい理想となるようお祈りを申し上げます。

●第三十四号（平成三十年五月三日）

さて、今日は、塩浜町に鎮座する塩釜神社の例祭です。

江戸時代中期（一、七六八年頃）に塩田が開かれ、製塩業が推し進められたのですが、明治四十四年の国の政策である「第一次製塩業整理」により廃業されています。およそ、百四十年の歴史があるわけです。最盛期は、「高田式大釜」を据えて、一釜あたり二百斤（約十二キロ）の塩を産出、一昼夜に十基の大釜を据えて製塩されていました。一釜あたりに、二十三振（三百六十八貫、約一、三八トン）の石炭が、必要でした。製塩業に従事する労働者を浜子と呼んだそうですが、広島の人が多かったそうで、釜焚きを含めて十人、夏季は四人増やして十四人で作業していたようです。その塩田、製塩業の守護神として、塩釜神社が勧請され、現在は、塩浜町民館の敷地にお遷し、お祀りされています。

「米塩の資」、生活費、生計費のことであります。私共の生活に欠かせないのが、お米とお塩なのです。正岡子規さんは、「病床六尺」で、「先づ食事に一家の者が集まる。食事をしながら雑談する。食事を終へる。また雑談する。これだけの事ができれば家庭は何時でも平和に、何処までも愉快であるのである」と述べられています。現代の家庭を顧みますと、孤食、個食、子食など、食育の重要性が叫ばれています。五月は、連休や母の日もありますし、家族での食事のひとときを大切にすごしたいものです。正岡子規さんのおっしゃった、何時までも平和に、何処までも愉快な御家庭、日常でありますように。

●第三十五号（平成三十年六月十九日）

イギリスの哲学者バートランド・ラッセルは、その著書「幸福論」のなかで、「親になることは人生最大の幸福である」と説かれています。

詩人の相田みつをさんは、「育てたように子は育つ」という短い言葉ですが、大変ショッキングな言葉を残されています。また、実践女子大学を創設された下田歌子先生も、「揺籃を動かす手は世界を動かす」と、「子育て」の大切さを諭されています。

福沢諭吉さんは、「家庭は習慣の学校であり、父母は習慣の教師である」と述べられています。相田みつをさんの言葉、下田歌子先生のお諭しにも通じるものがあります。さらに、「しかもこの習慣の学校は、教育を行う学校よりもはるかに力があり、極めて大きな効果を与える」と説かれました。詩人の坂村真民さんは、「あとから来る者のために」という詩を残しています。

「あとから来る者のために田畑を耕し　種を用意しておくのだ　山を川を海をきれいにしておくのだ　ああ　あとから来る者のために　苦労をし我慢をしみなそれぞれの力を傾けるのだ　あとからあとから続いてくる　あの可愛い者たちのためにみなそれぞれ自分にできる　なにかをしてゆくのだ」

地域社会が、「何時でも平和に、何処までも愉快である」、まさに、幸せであるように、力を傾け、自分にできるなにかをしていかなければならないと思います。ご自愛ください。

●第三十六号（平成三十年七月十五日）

幕末の神道家である本田親徳は、

「音に聞き　眼に見えるもの　ことごとに
　　産土神の　御身にこそあれ」

と詠まれています。また、文明十八年、西暦一四六八年に、吉田神社の神職であった吉田兼邦は、

「天地の　中にみちたる　草木まで
　　神の姿と　見つつ恐れよ」

という和歌を残されています。哲学者の西田幾多郎先生も、「見えるものは　見えざるものの影」とおっしゃいました。見えない心を形に表したのが、「言葉」「言霊」なのです。見えざるものの影と恐れ、敬う、このミックスした心を形にあらわしたものが、「畏敬」、「畏み」という言葉です。

これまで、沢山の方が自然災害で犠牲になられました。江戸時代後期の米沢藩主の上杉鷹山の指南役をつとめた、細川平州は、「学思行（がくしこう）相（あい）まって良（りょう）となす」と諭されました。学んだことをよく考えて、そして、実行してはじめて、本当に学んだことになるという教えです。「異常気象」が、日常と化しているなか、私共は、この西日本の豪雨がもたらした「平成三十年七月豪雨」の災害を教訓として、「学思行相まって良となす」、しっかりと、防災減災につとめてまいらなければなりません。衿を正して真心こめて、「畏み」という言の葉を奏上し、一意専心、神明奉仕につとめ、祈りをささげなければと思いを新たにしています。

社務日誌抄

（本宮祭典諸行事厳修報告）
―平成三十年一月～十二月―

睦月（一月）

一日　初太鼓　歳旦祭

三日　元始祭

＊天皇陛下御自ら宮中三殿【賢所（かしこどころ）、皇霊殿、神殿】において皇位の始源を祝し親祭あそばされました。当宮においても皇位を祝寿する祭祀を厳修致しました。

阪神タイガース小野泰己投手正式参拝

十四日　どんど焼き

十六日　下関老人大学正式参拝

三十日　愛知県神社庁西尾幡豆支部正式参拝

如月（二月）

三日　節分祭追儺式

＊悪神邪気、不幸を追い払い、氏子崇敬者の招福と平安な生活を祈念申し上げました。神事終了後は、境内特設花道に於いて福豆・福餅が撒かれ賑わいをみせました。

十一日　紀元祭建国奉祝祭

＊我国の初代天皇である神武天皇が橿原宮で即位された古えを偲び、建国創業の御神徳を景仰し、皇室国家の弥栄を祈念申し上げ、当宮神前を通して橿原神宮を遥拝致しました。

建国記念日奉祝パレード

十七日　祈年祭

＊農耕祭儀の中でも重儀「としごいのまつり」とも言い、本年の五穀豊穣を祈念申し上げる重要農耕祭祀を厳修致しました。

十九日　防衛省海上自衛隊敷設艦むろと艦長以下乗組員昇殿参拝

弥生（三月）

三日　横浜ＤｅＮＡベイスターズ必勝祈願祭

元横浜ベイスターズ中根仁氏、内藤雄太氏参列

二十一日　春季祖霊祭並びに神道会総会

＊家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭。「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という〝春分の日〟の意義を継承し、自然万物に感謝の祈りを捧げる祭儀を斎行致しました。

卯月（四月）

一日　勧学祭

＊今春めでたく入学されました新一年生の児童生徒の皆様の学業成就・交通安全・無病息災を祈願する新入学奉告祭を月次祭に併せ厳修致しました。

四日　彦島八幡宮維蘇志会昇殿参拝並総会

十四日　舟島神社例祭並びに佐々木小次郎剣客祭

＊巌流島の決闘から四百五年。佐々木巌流の正統派流儀の武道和良久による剣舞、正真流吟剣詩舞道の御神楽が奉納されました。

二十二日　彦島地区戦没者慰霊祭

＊日清・日露戦争から大東亜戦争において、国のため郷土のため家族のため国の御盾となり犠牲となられた彦島地区出身の四百五十一柱の御英霊の御前にて慰霊祭を雨儀により斎行致しました。

二十九日　昭和祭

＊激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、我国の将来に思いを馳せ、昭和天皇陛下のご聖徳をお讃え申し上げますとともに、ご皇室の弥栄と国家の繁栄を祈念申し上げました。

皐月（五月）

十三日　彦島八幡宮敬神婦人会昇殿参拝並総会

二十五日　彦島八幡宮奉賛会昇殿参拝並理事総会

水無月（六月）

九日　皇太子同妃両殿下御結婚二十五年奉祝祭

二十九日　第一回茅の輪奉製作業

三十日　水無月大祓式

＊カヤとヨモギが神秘的な除災の力を有するという故事に倣い、氏子奉賛会の皆様が奉製した「茅の輪」を潜り、上半期の罪穢れを人形にうつし、祓の神事を厳修致しました

文月（七月）

二十七日　第二回茅の輪奉製作業

二十九日　夏越祭前夜祭・菅抜神事

＊当宮では水無月の大祓に加え夏越の大祓も執行しています。カヤとヨモギで奉製した茅ノ輪を潜り、分魂を宿らせた人形を焚き上げる古式。罪・穢れを祓い清めました。当宮では水無月晦日より一ヶ月の間に計二度奉製致します。

三十日　夏越祭御神幸祭・海上渡御

＊御祭神の御霊を奉じた御神輿が氏子地域を中心に陸上海上を隈なく御神幸致しました。

葉月（八月）

五日　まほろば学級

＊情操教育の一環として彦島地区の小学生を対象に、鎮守の杜で神社の歴史、作法、雅楽体験等々を通して夏休みの思い出として一日を過ごしていただきました。

彦島八幡宮　検索

長月（九月）

十一日～十六日　神道家中元祭斎行

＊上元（一月十五日）中元（七月十五日）下元（十月十五日）を先祖供養の日と定めた「みたま祭」の故事に肖り、日本人に親しみある盆行事の一環として毎年斎行致します。

二十三日　秋分祭秋季祖霊祭

＊「祖先を敬い、亡くなられた人々を偲ぶ日」という秋分の日にちなみ、日毎ご加護をいただいている祖霊慰めの祭儀を斎行致しました。

神無月（十月）

二十四日　観月会　中秋の名月

＊約百名の参列者のもと日本酒と共に名月を愛でながら、日本の風土、豊かな四季を大切にしてきた伝統的な日本人の「こころ」に思いを馳せました。

十七日　神嘗奉祝祭

＊伊勢の神宮で新穀が奉られ五穀の豊穣に感謝の祈りが捧げられました。この祭典を奉祝し当宮におきましても厳粛に斎行され、神宮を遥拝致しました。

十九日　秋季例大祭前夜祭

二十日　秋季例大祭本殿祭並びにとこわか奉納会物産品奉献

＊神社本庁より幣帛が奉られ、一年に一度の大御祭が斎行されました。

二十一日　秋季例大祭御神幸祭　サイ上り神事

＊当宮創祀者の河野通次を偲び、八五九年伝統の無形民俗文化財指定「サイ上がり神事」も厳かに執り収める事が出来ました。

霜月（十一月）

三日　明治祭

＊戦前の明治節にあたり、四大節（四方拝節）、紀元節、天長節、明治節）の一つです。明治天皇様のご生誕とご聖業を讃えるとともに、皇室の更なるご繁栄を祈願致しました。

十五日　七五三祭

＊お子様の成長をご祭神へご奉告し、ますますの健やかな成長を月次祭に併せお祈り申し上げました。

二十三日　新嘗祭

＊天皇陛下が五穀の新穀を天神地祇（てんじんちぎ）に勧め、また、自らもこれをお食しあそばされて、その年の収穫を感謝する古来より伝わる稲作儀礼の祭儀です。宮中三殿の近くにある神嘉殿にて執り行われます。当宮におきましても、新穀をご祭神へお供え致し、収穫を神恩に感謝申し上げ、厳粛に執り行いました。

師走（十二月）

二日　大注連縄奉製・煤払式

＊神域と外界とを隔てる拝殿大注連縄の奉製が執行され、本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄が掲げられました。終了後、煤払式を執行し一年間の汚れを掃き清めました。

二十三日　天長祭

＊今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥栄をお祈りする祭典です。天長祭とは、古来、唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝った事に由来します。天長とは老子の「天長地久」という言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を含んでいます。

正月臨時巫女奉仕者説明会

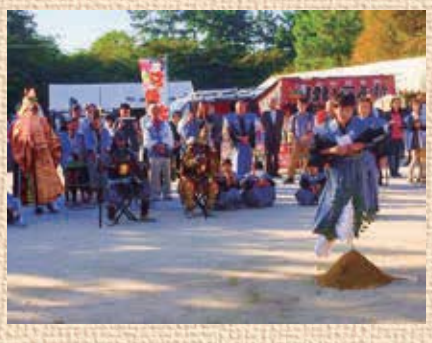
三十一日　大祓式

＊私たちが日常生活のなかで、知らず知らずに犯してしまった罪穢れを人形（ひとがた）に託して身体を清め、心新たに新年を迎え生活を営むべく心技体を整えます。

新守札清祓式

除夜祭

平成三十年十月十九日～二十一日　御創祀八百五十九年例祭厳修



秋季例大祭

平成三十年 新年御供米料奉献会社ご芳名

【※順不同、敬称略】

●農水フーヅ㈱
●キャボットジャパン㈱下関工場
●チヨダウーテ㈱下関工場
●桃歳水産㈱
●㈲マルイチ彦島醸造工場
●㈱中冷
●㈲マルゲン包材
●㈱副田工務所
●大田造船㈱
●㈱彦島造園
●香洋工業㈱
●㈱田原工務店
●ジャパンマリン㈱
●下関唐戸魚市場㈱
●㈲フジタ石油
●タナカ機工㈲
●青木鉄工㈱
●㈱大庭工務店
●㈱大伸運輸
●下関農協彦島支所
●㈲上釜電機商会
●㈱ユキテクノ
●下関酒造㈱
●古賀産業㈱
●テーラーしばた
●山口県漁業協同組合彦島支店
●和田電機㈱
●西中国信用金庫西山支店
●山口銀行彦島支店
●㈱サントー
●㈲三宅商店
●㈲百合野
●㈲ライフクリーニング
●松田内科クリニック
●㈱下関ユアサ建材
●㈲岩原クリーニング工業所
●日新リフラテック㈱
●㈲枝村ドラム工業所
●㈲ライス&ミルク上村
●濱崎正俊
●山口県漁業協同組合下関南風泊支店
●㈲南国シティタクシー
●高保工業㈱
●関門三協工業㈱
●㈲植田商会
●植田木材㈱
●みなと不動産
●㈱室田組
●㈱広洋エレクトリック
●㈱共立機械製作所下関工場
●㈲オカダ工房
●大久保本店
●三池屋
●㈱ナカハラプリンテックス

平成三十年元旦御接待奉納

●池田興業㈱下関支店

平成三十年 節分祭 御協賛会社御芳名

【※順不同、敬称略】

【設営協賛の部】

▼舞台花道設営
㈱新原工業

▼照明設備
㈲タツミ電工

【協賛金の部】

下関三井化学㈱
彦島製錬㈱
キャボットジャパン㈱下関工場
オルネクスジャパン㈱下関工場
三菱重工業㈱下関造船所
MHIファシリティーサービス㈱
サンセイ㈱下関工場
㈲前田造船所
日新リフラテック㈱
下関唐戸魚市場㈱
協立運輸商事㈱
池田興業㈱下関支店
西和建工㈱
アルギン㈱
ジャパンマリン㈱
青木鉄工㈱
㈱田原工務店
㈱ユキテクノ
㈱大田造船
㈱大庭工務店
タナカ機工㈲
花のタムラ
西京銀行彦島支店
西中国信用金庫西山支店
㈱山口銀行彦島支店
㈱ナカハラプリンテックス

第十三回まほろば学級寄稿感想文

「まほろば学級を終えて」

下関市立向井小学校
四年　池田　羽奈音

私が何故参加したかというと、兄が参加して『凄く楽しかったよ』と言ったからです。

始まってからの気持ちはドキッとしましたが、私の学校の友達がいたから安心しました。

先ず雅楽演奏では、音がきれいで眠くなってしまいました。そうめん流しは初めての体験で楽しかったです。あんどん作りでは意外に簡単で直ぐに出来ました。かき氷は美味しくて二回もおかわりをしました。紙芝居では彦島の歴史など勉強になりましたが少し眠たくなりました。宮司さんの話では色々な事を教わりました。その話を聞いて、私は、食事の時の食前感謝詞と食後感謝詞の言葉を気を付けてやってみようと思いました。夕食のカレーはとても美味しかったです。ゲームや花火をしてとても楽しい一日でした。

閉校式では、終了証をもらってとても嬉しくなりました。

五年生になっても、またまほろば学級に参加したいです。ありがとうございました。

第四回 やまぐち神社・お祭り写真コンテスト入賞者

山口県神社庁長賞【神社風景部門】

『彦島八幡宮 桜の花咲く頃』
藤井　國夫（彦島西山町）

第二十六回 神社・お祭り自由画コンテスト入賞者

金賞

榊　貴教
（角倉小学校一年）

特別賞

西野　羽音
（くりのみ子供園）

氏子青年会便り

去る七月二十一日(土)～二十二日(日)に第五十一回中国地区氏子青年・神道青年 合同研修会(主題＝神話に学ぶ祭祀の源流～受け継がれる祭りのこころと道具立て)が島根県松江市 玉造温泉 松乃湯・ゆうゆにおきまして開催され、当宮氏子青年会 維蘇志会(会長＝石崎研二)四名が参加致しました。

第一講は、島根県神社庁理事 立虫神社並万九千社宮司 錦田剛志先生による『今さら聞けない神マツリと奉仕の起源～天之岩戸神話をひもといて』と題しわかりやすい講義を拝聴し、第二講は、伝統的な注連縄作りを体験させていただきました。

翌日は、玉作湯神社にて豪雨災害復興祈願祭に参列し、国宝 松江城へ登閣し宍道湖はじめ絶景に一同感銘致した次第であります。

現在、松江市鎮座 平濱八幡宮並武内神社に奉職中の当宮柴田宮司嫡男明典氏も参加され、懇親を深めた有意義な研修会でありました。

敬神婦人会便り

去る十月三十日(日)に敬神婦人会(会長＝柴田徳美)二十三名にて会員の親睦と研鑽を踏まえ、王政復古百五十年の佳節に維新胎動の地 萩市へ日帰りの研修旅行を執行致しました。

松陰神社へ正式参拝をし、青田宮司様の特別な御計らいもあり松下村塾にて講話を戴くなど丁重にご歓待賜りました。その後、明倫学舎等も見学し日本の産業革命遺産群にふれ研鑽を深めた次第であります。

又、映画『八重子のハミング』にも所縁がある金谷天満宮にも参拝させていただき、思いで深き研修となりました。

奉納グラウンドゴルフ大会入賞者(敬称略)

★夏 越 祭 七月八日(日)於、江浦小グラウンド

①岩本 勝雄　②上妻 敬一
③堀本三千男　④赤川征一郎
⑤小林 弘子　⑥北永 克彦
⑦長谷部嘉代美　⑧坂元 忠男

★秋季例大祭 十月七日(日)於、江浦小グラウンド

①岩本 順子　②土居 茂勝
③加納 裕史　④坂本 忠男
⑤吉永 武　⑥赤川征一郎
⑦松田 隆弘　⑧花屋 教治

彦島八幡宮杯争奪ソフトボール大会成績

十一月十一日(日)

★第一部

優 勝　彦島クラブ
準優勝　チームZERO
三 位　シャーク
最優秀選手　福永幸貴(彦島クラブ)

★第二部

優 勝　しんせい'S
準優勝　奇兵隊
三 位　ライジング
最優秀選手　武久幸憲(しんせい'S)

★第二回リーグ戦

チームZERO

1部優勝

リーグ戦優勝チームZERO

1部1位

2部優勝

奉祝 平成から新しい御代へ 即位礼と大嘗祭の意義について

去る平成三十年四月三日に、政府は即位礼の基本方針を平成の御代替わりを踏襲する形で、閣議決定しました。本年は御代替わりに際し、国家の最重要儀礼が執行されます。ここでは、基本方針に沿った改元後の主軸となる一連の儀式儀礼をご紹介致します。

五月一日　剣璽等承継の儀

皇位を継承された天皇陛下が、御即位の証として、「皇位とともに伝わるべき由緒ある物」（皇室経済法七条）である剣及び璽を承継されるとともに、併せて国事行為の際に使用される国璽（法律や政令等の交付文認証文に押す為の天皇陛下の印章）及び御璽（国家のしるしとして押す印章）を承継される践祚の式

五月一日　即位後朝見の儀

即位された天皇陛下が、御即位後初めて公式に三権の長（立法権＝衆議院議長並びに参議院議長、行政権＝内閣総理大臣、司法権＝最高裁判所長官）を始め国民を代表する人々とお会いになる践祚の式

十月二十二日　即位礼正殿の儀

即位礼の中心となる儀式であり、皇祖天照大御神に御奉告あそばし、各国首脳や国家元首に御即位を公に宣明されるとともに、そのご即位を内外の代表がことほぐ儀式であり諸外国でいう戴冠式にあたる。先帝昭和天皇様までは京都で斎行された。

※現在では皇居　正殿松の間にて京都御所紫宸殿から陸送された高御座（たかみくら＝天皇位を象徴する玉座であり、皇位継承の中核をなす）御帳台（みちょうだい＝皇后の御座）がしつらえられ、男性皇族と三権の長らは高御座左側に、女性皇族が御帳台右側に参列する。大正天皇様の即位に合わせ奉製され、高さ約6・5メートル、重さ約8トンで、朱塗りの高欄で囲まれた台に八本の柱が立てられ、八角形の屋根を支える。屋根やその角には金銅の鳳凰が飾られている。御帳台は高さ約5・7メートルで一回り小さい。

十月二十二日　祝賀御列の儀

即位礼正殿の儀終了後、広く国民にご即位を披露され（オープンカーで行われる祝賀行幸であり沿道等にて国民が祝福する）、祝福を受けられる為の御列

十月二十二日以降数日間（未定）　饗宴の儀

御即位を披露され、国民の代表や諸外国の賓客の祝福を受けられるための饗宴　舞楽等も披露される

十月二十二日以降数日間（未定）　一般参賀

御即位を奉祝する国民の参賀を長和殿ベランダより受けられる

十一月十四、一五日　大嘗祭（大嘗宮の儀）

天皇陛下が御即位の後、大嘗祭斎行にあたり点定された神聖な斎田の新穀を、皇祖及び天神地祇に供える為に、特別に造営された大嘗宮の悠紀殿及び主基殿へお供えされ（悠紀殿供饌の儀・主基田供饌の儀）、御告文を奏され御自らもお召し上がりあそばされ、国家・国民の為にその安寧と五穀豊穣を感謝し祈念される儀式。大嘗宮の儀は大嘗祭の中核をなします。

●大嘗祭の意義と沿革

大嘗祭は、前述した通り新天皇が即位して初めて斎行する新嘗祭（新＝新穀、嘗＝ご馳走　※神様の恵みにより初穂を戴く事へ感謝する収穫祭）の事であり、御一代一度の皇位継承儀式である。我が国は農耕民族が稲作文化を中心とした社会の礎を築き、発展を遂げてきたが、その収穫儀礼に根差したものである。

大嘗祭の沿革をたどると、その起源は、新嘗祭に由来する。新嘗祭については、諸説あるが「日本書紀」において、飛鳥時代　皇極天皇の御代にはじまるという記述があり、常陸国風土記に引く説話や万葉集の和歌にも確認される。

飛鳥時代までは天皇一世に一度斎行される大嘗祭と毎年斎行される新嘗祭との区別はなかったが、天武天皇の御代に初めて、大嘗祭と新嘗祭とが区別された。以来、大嘗祭は一世に一度斎行される極めて重要な皇位継承儀式とされ今日まで続き、歴代天皇様は、即位後必ず大嘗祭を厳粛に斎行される事が皇室の伝統となっている。

彦島八幡宮　検索

皇居勤労奉仕をお仕えして

彦島八幡宮　権禰宜　山本　光徳

去る平成三十年六月、天皇陛下御即位三十年の佳節に、山口県青年神職会創立七十周年記念事業「皇居勤労奉仕団」副団長を仰せつかり皇居、赤坂御用地の勤労奉仕をお仕えさせていただきました。

皇居勤労奉仕団とは皇居や赤坂御用地の除草、清掃、庭園作業を行う団体で、十五人から六十人までで構成され（十五歳以上七十五歳以下）平日連続四日間作業を行う団体の事です。期間中には天皇陛下皇后陛下より直接お労りのお言葉を拝受する有難い貴重な機会があり、これを「御会釈（おえしゃく）を賜（たまわ）る」お問いかけには「御下問を戴く」と申します。昭和二十年十一月二十二日に宮城県栗原郡の鈴木徳一氏と長谷川峻氏が戦後荒廃し草木が生い茂った皇居の草刈りを申し出たことに端を発し、昭和二十年十二月八日占領下容易でない時期に、鈴木氏長谷川氏両名を含む総勢六十二名の宮城県栗原郡青年団が「みくに青年団」と称し三日間奉仕した事が皇居勤労奉仕団の起源であります。実際には、戦災の爪痕残る中での瓦礫の撤去作業が中心でありましたが、先帝昭和天皇様は甚く感動あそばされた由、当時の記録にて窺い知ることができます。位階勲等がなければ皇居参内が許されなかった時代、彼らの熱意に宮内省が勇断した事は正に画期的であり、これを契機に昭和二十三年には「一般参賀」がはじまり「皇居勤労奉仕団」と共に今日まで続いています。

奉仕前日、先ず皇城の鎮たる日枝神社（千代田区永田町鎮座）に正式参拝を致し、備えた次第です。奉仕期間中は、毎朝桔梗門にて所定の手続きを経て皇居内へと進むことが許されます。宮中三殿はじめ宮殿傍での作業等々、連日の高温注意報の中での除草作業でしたが、時折宮内庁の方々の貴重なお話も拝聴でき、大変充実した奉仕でありました。都心の真ん中で豊かな自然環境のもと想像以上に生物相を体感でき、腐葉土にいたるまで保全水準の高さに驚愕致しました。天皇陛下皇后陛下更には皇太子殿下に御会釈を賜り御下問を戴く、正に忝さに涙零るる恐悦至極なる有り難い時間も賜り、僅か数尺の距離が、殊の外、遥か遠くに尊く感じた瞬間でした。我々に親しく接せられる御姿を拝し奉り、正に国体を具現される大御心そのものであると感じた次第であります。大学時代に野球で汗を共に流した宮内庁掌典職をお仕えする同期とも再会を果たせ感慨も一入でありました。

最終日の慰労会にて後輩神職が「天皇陛下皇后陛下は、日本国の父君様、母君様であらせられる。」と申しました。正に有り難く尊い日本国の父君、母君であらせられ、年間内外にわたり多くの公式行事を象徴天皇としてお務めあそばされています。常に御自ら人々に寄り添われ苦楽を共にされる御姿は周知の通りかと察します。その御高恩に、一国民として畏敬と感謝の念を捧げるべく、此の度の貴重な機会を賜りました。僅かながら恩返しをさせていただけたかと存じます。これを機に、更に皇室の伝統をより広く多くの方に啓蒙を図っていく事に邁進する所存であります。

本年は、御代替わり改元の佳節を迎え、即位の礼と大嘗祭が斎行されます。国家の最大最重要の儀式に、伊勢の神宮式年遷宮の際に多くの日本人や世界が注目し感化したように、それ以上に国民一人一人の意識や関心が高まり奉祝の輪が広まる事を念じつつ、万古不易の皇室国家が愈々栄えます事を衷心よりお祈り申し上げる次第です。

結びに昭和天皇様並びに今上陛下が皇居勤労奉仕団へお詠みあそばされた御製を幾つか紹介させていただきますので、大御心の一端に触れ感じていただければ幸甚に存じます。

昭和天皇御製

戦（たたかひ）にやぶれしあとのいまもなほ
民のよりきてここに草とる

今上陛下御製

地方より奉仕作業に来し人に
痛みつつ聞く長雨の災（わざ）

豊かなる稔（みの）りなりしといふ人の
多き今年の秋を喜ぶ

（桔梗門）

彦島八幡宮の御朱印帳を奉製!!

社務所にて頒布致しております。（タテ十六㎝／ヨコ十一㎝）

彦島内に鎮座致します神社の御朱印も押印致しますので、是非ともお誘いあわせの上、彦島七社巡拝もご案内申し上げます。

平成31年（己亥）厄年・年祝表

（年祝）

上寿祝	大正 9年生（100歳）	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正10年生（99歳）	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	昭和 5年生（90歳）	卒は略字で卆と書き九十と読む。
米寿祝	昭和 7年生（88歳）	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和15年生（80歳）	傘は略字で𠆢十と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和18年生（77歳）	喜は草書で𡚁と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和25年生（70歳）	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和34年生（61歳）	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

（厄年）

性別	年齢	前厄	本厄	後厄
男	25歳	平成 8年生（24歳）ねずみ	平成 7年生（25歳）いのしし	平成 6年生（26歳）いぬ
	42歳	昭和54年生（41歳）ひつじ	昭和53年生（42歳）うま	昭和52年生（43歳）へび
	61歳	昭和35年生（60歳）ねずみ	昭和34年生（61歳）いのしし	昭和33年生（62歳）いぬ
女	19歳	平成14年生（18歳）うま	平成13年生（19歳）へび	平成12年生（20歳）たつ
	33歳	昭和63年生（32歳）たつ	昭和62年生（33歳）うさぎ	昭和61年生（34歳）とら
	37歳	昭和59年生（36歳）ねずみ	昭和58年生（37歳）いのしし	昭和57年生（38歳）いぬ

（八方塞がり）

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区分され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめぐり、九年に一度中央に入ります。これが八つの星（方位）に囲まれた状態である**八方塞がり**です。
不安定な年とされ、より注意をしなくてはならいない年です。
八方除けの祈願や方位除けの御守をお受けになられ、御神慮を恐み慎む事をお勧め申し上げます。

本年は**八白土星**の方が該当致します。（＊以下に表記）

昭和4年、昭和13年、昭和22年、昭和31年、昭和40年、昭和49年、昭和58年
平成4年、平成13年、平成22年

（金神様の方位）

本年は以下の五方位が凶方位となります。引っ越し、旅行、転勤等々留意しなければなりません。

巡金神	午・未・申・酉（南西を中心に南から西）	大金神	申（南西の西より）	姫金神	寅（北東の東より）

（七五三祝）

髪置祝	平成29年生の男女（3歳）	髪を伸ばし整え始めること。
袴着祝	平成27年生の男子（5歳）	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
帯解祝	平成25年生の女子（7歳）	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

祈願祭（お祓い）は数え年でお受けしましょう。

「数え年」は、生まれた時点を1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。
これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。
満年齢に誕生日前であれば2歳、誕生日を迎えた後は1歳を加える解釈となります。

発行所　彦島八幡宮社務所
下関市彦島迫町五丁目十二番九号
TEL〇八三―二六六―〇七〇〇
FAX〇八三―二六六―五九一一
ホームページ http://www.hikoshima-guu.net
発行者　柴田宜夫
題字　山本光徳
編集者
平成三十一年一月一日
印刷・㈱ナカハラプリンテックス

奇跡を発動する神宿る磐座
彦島八幡宮ペトログリ（ラ）フ

当宮には古代文字（シュメール文字）が刻銘された巨岩が奉安され、全国各地より著名人や芸能人、また難病や病気療養中で悩んでおられる方々が拝観参拝のため訪れます。
自然崇拝にもとづく神宿る聖なる磐に神様を感じ、神様の威大なる力を戴かれて下さい。
近年は『叶い石御守』をお受けいただき、磐の上に置き祈りを捧げ願いを込める方々も多く見受けられます。
※詳細は当宮ホームページをご参照下さい。

1月 1日（火）	赤口
13日（日）	先勝
25日（金）	先勝
2月 6日（水）	友引
18日（月）	友引
3月 2日（土）	友引
14日（木）	先負
26日（火）	先負
4月 7日（日）	大安
19日（金）	大安
5月 1日（日）	大安
13日（月）	赤口
25日（土）	赤口
6月 6日（木）	友引
18日（火）	友引
30日（日）	友引
7月12日（金）	先負
24日（水）	先負
8月 5日（月）	大安
17日（土）	大安
29日（木）	大安
9月10日（火）	先勝
22日（日）	先勝
10月 4日（金）	友引
16日（水）	友引
28日（月）	仏滅
11月 9日（土）	仏滅
21日（木）	仏滅
12月 3日（火）	大安
15日（日）	大安
27日（金）	先勝

安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められております。
ご持参頂いた腹帯（マタニティガードル）に当宮の「安産守護」の御朱印を押印させていただきます。
＊平成三十一年（五月改元）の戌の日

彦島八幡宮　検索